

——まずご経歴をひとつ……

昭和5年の仙台生まれです。26年に仙台工専を出て建設省へ入ったんですが、2年でやめて大林組へ変わりました。それからは基地の拡張工事をやったり、戦後再開された初期の地下鉄工事の現場へ回されたり、転々とした生活でしたね。その間に結婚して女の子が二人できました。電発ブームで一時はなやかだった大ダム工事とか、それに続く名神や新幹線なんかの現場に比べれば、地味な仕事が多かったように思います。

——それで海外へ出られたのはいつですか？

国内で10年仕事をしまして、昭和39年に出了ました。私の会社がマレーシアのペナンに近いある火力発電所の仕事を受注したので志願したんです。単身赴任というのが常識だったんですが、私はどうせ行くならと家族4人で出かけたんです。なれるまでは、皆大変でした。子供は現地の学校へ入れたんですけど……日本語をすぐ忘れてマレー語でしゃべっていましたがね。

結局マレーシアには3年いてシンガポールへ移りました。工事のめどもついたんでもう帰れると思っていたのですが、シンガポールで同じような火力発電所の工事がでて、見積りの応援にやられたんです。結局この仕事がとれたんで引続いてやってくれということになった訳です。“一丁腰を着着けてやれ”と、そう抵抗はなかったですな。だんだん仕事が目白になってきたせいでしょう。職名は現場の次長で、工事の計画やコンサルタントとの折衝をおもにやりました。シンガポールには、さすがに日本人学校があったので子供達はそこへ通わせて

いました。

——シンガポールから今の所へ移られたきっかけは？

シンガポールの仕事は、45年の初めにはほとんど終わってたんです。そこで働いていた日本の連中も[国]へ帰って私一人残ってクレームの処理なんかをやっていた訳ですが、そこへ会社から今度は東パキスタンへ行ってくれないかという命令がきたんです。去年の秋にサイクロンの災害をうけた東パキスタンの首府のダッカの近くです。道路工事の仕事がとれたのでご苦労だが……という次第です。

これはアジアハイウェイの支線で

して、ダッカーチャッタゴン道路の工事だということでした。いろいろ考えましたが環境も余り良くないと聞きましたんで、子供達は日本に帰すことにして、45年の6月に家内と現地へ乗り込んだんです。ダッカ郊外のチタラキヤリバーにかかる430メートルの橋梁工事が主体でして、ウエルの基礎を下げて現場製のPC桁を架設する仕事です。大林組・三井物産のジョイントベンチャーで、私はそのプロジェクトマネージャーということになっていますので、いまが一番いい時期になってきました。笑い話なんですが、うちの社のマークがベンツのマークに良く似ているでしょう。ヘルメットをかぶって仕事をしてますと、「どうして自動車会社が道路工事をやってんだ」これには参りました。しかし伝統のある製品の知名度というものは大したものだなあと思いましたね。

——39年に日本を出られたままだ7年ということになりますね。こういう連続した海外滞在は非常に珍しいケースなのでは……

普通、海外勤務は一現場かぎり、しかも半年から1年に1回は休暇のために帰国するのが常識のようです。私は三現場続いているうちに、家族づれなので6年間も日本の土を踏みませんでした。去年ひさしぶりに帰ったときには全く浦島太郎の心境でしたね。今の仕事は48年までかかるので、それまではまず日本を見ることもないでしょう。

——お子さんのこともご心配でしょうね。ご苦労の連続とは思いますが、その一端をひとつ……

そうですね。この頃では海外工事の経験者もふえましたが、皆さんと同じように私も人並みな苦勞は、ひととおり味わってきました。想像していたとはいいながら、実際にぶつかると大変でした。言葉もそうですが、欧米式の契約制度に慣れないために損をしたり、機械の部品が故障してしまって補充がつかず、高い機械を何日も遊ばせたり、本当に切実な体験が多くて……。

——いまも契約のお話が出ましたが、Spec に対する彼等の考えは実にきびしいとか……

そうなんです。施主側のコンサルティングエンジニアとの交渉なんかは、日本の施主の監督員に対する場合なんかと比べると全然ちがうんですね。とにかく現場のインスペクターは Spec に書かれていることは、いくら現実に合わなくても実行を迫るんです。まあ彼等の権限というのが Spec どおり施工されているかどうかをチェッ

クするだけなんで、どうしようもないのでしょうかね。仕様の変更なんてことになったら本国、つまりイギリスやアメリカのエンジニアにさんざん照会してからようやく OK……時間ばかり食って頭にきます。ですからコントラクターのほうも契約にない命令がでたら、ひとつひとつ丹念に Change Order による請求を出す訳です。こういう請求だけに限らず、先方のエンジニアと交渉して、それが了解された事項であっても必ず文書で確認しておかなければ泣きを見ることになるんです。

—なるほど。慣れなければノイローゼになってしまうでしょうね。

私の場合はマレーシアでもシンガポールでも幸いなことに英語、中国語、日本語がよくできる中国系の現地人を雇えましたから、とても助かったんです。毎日毎日コンサルタントへ出す文書を彼に作らせたんですが、それ



が大きなファイルで 50 冊以上になってしまって、その分類や整理だけでも一苦勞でしたよ。

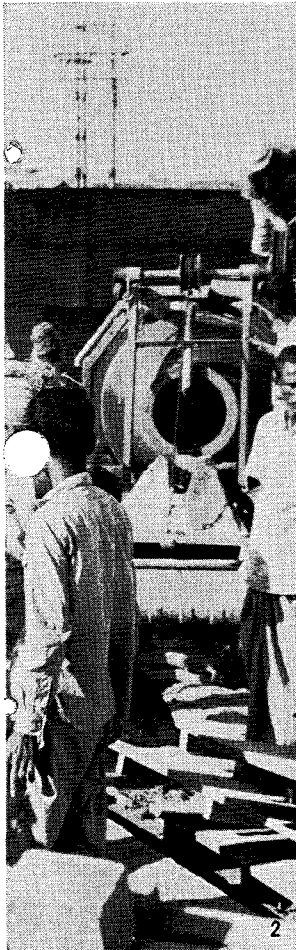
しかし、初めはつい遠慮がちだったわれわれも、こういう契約觀念に慣れてきますと、どんな小さな問題も文書で請求するようになった。あるときなんか道路標識を立てるようにエンジニアに要求されて、早速 2 ドル何セントかの請求書を持っていったんです。さすがに苦笑しましてね……「それくらいは私のポケットマネーで払ってやる」って自分のポケットに手を突っ込む真似をしましたっけ……あとで工事費で払って貰いましたが、まあ一事が万事そんな調子なんですよ。

——あなたは現地人からの信頼も厚いと聞いておりますが、その辺のコツなり心がまえをお聞かせ下さい。

海外工事は国内と違って上司の指示を一々あおぐ訳にはいきません。ですから自然に大きな判断を自分自身の

能力でやらざるを得ません。そのためには勉強もしなければなりません。近頃は私も少し欲が出まして自分なりに目標を立てて海外工事のエキスパートになってやろう、まあそんなことを考えるようになりました。コツなんてものは特にありません。平凡なことですが、とにかく現地の生活に慣れることです。誠実に現地の人とつき合うことです。私の家に来られる日本人はみな「現地人の家と同じようだ」というんです。日本的なものは全く何も置いてないし、第一家具なんてものがほとんど無いんですから……。

それから風習に溶け込むには現地の生きた言葉をおぼえなければなりませんね。教科書でなく労働者相手の現地語を早くマスターしないと仕事になりません。まず単語を教わって、それを片カナでノートして次は実際に使ってみるんです。単語をある程度おぼえたら同じような



【写真説明】

- 1 凶面をもとに現地技術者と慎重な打合せを続ける一条さん。ひたいに刻まれたシワが消える日は、まだまだ遠い。
- 2 東パキスタン、ダッカの近くの橋梁基礎工事現場風景。サイクロンの被害は大したことがなかったが、目下この国の政情は悪化の一途をたどっているようだ。何事もなく何年か先にはアジアハイウェイの支線として、日本の土木屋が現地の人達とつくった坦々たる高速道路がここを横切ることを祈りたい。
- 3 コンサルタントとの打合せ会議。契約優先の欧米流の慣習には最初は全く泣かされたという。
- 4 自宅でご自慢のテーブルデッキに聞きい一条さん。大変なオーディオ狂の由だが、大切な憩いのひとときである。カメラも好き——ただしメカが大好きなんだそうである。

方法で文章へすすむ……何しろ生活がかかっていますんで必死でした。家内も買物や使用人を十分に使いこなすために一生けん命に勉強しましたね。その点、子供は実に早くおぼえますなあ。日本語もすぐ忘れますけど……。やはり言葉がある程度できるようになると、いらいらしないで済むんで、家庭生活も落ち着くということになります。

——住めば都という心境になってゆくという訳ですね。ところで一条さんは大変ご趣味が広いとか……

いや、趣味といってもやはり仕事に関連があるんですけどね。私はその国の歴史を調べるのが好きなんです。休みの日なんか史蹟を求めてドライブしていますと、人類の歴史にじかに触れられる……外国にいることを忘れるほどの雄大な空間を感じますね。貴重な時間だと思っております。私、とても凝り性のほうでして、カメラも好きには違いないんですがカメラそのもの……機械にほれ込んだりなんです。撮るときも時間をかけて少しでもよく撮ろうというタイプです。ランの花ひとつ撮るのに炎天下で一日がかり

——プロでもないのに、そんな馬鹿なことを真面目にやっていますからね。ステレオも好きなんですが、音楽を楽しむのじゃなくてメカに凝るんです。テストレコードなんかで、ほかの人に聞きとれないような波長の音を聞き分けたときの嬉しさは、何ともいいようがありません。いま私がもっているステレオは日本では、マニアの間では、そう目新しいほどの機械ではないんですけど、シンガポールには3台しかない、なんておだてられました。自分でも“相当深入りしてるな”と思っておりますよ。

家内もイタリアの陶器やガラスを集めたり、ドイツの刃物に凝ったり、結構たのしんでいるようですよ。

海外生活はシンが疲れますんで、仕事以外に何か息抜きがないと続きません。これから海外へ出られる方々は大きい趣味を豊かにされることをおすすめします。

——貴重な体験談を聞かせていただき、たいへん参考になりました。どうか健康に留意され、幅広いご活躍をお祈りしております。



以上で一条一郎さんとの対話を終わる。土木学会誌でも海外活動の重要性をとりあげ、最近では、進まぬ海外進出(55巻3号)、特集・土木技術者の海外活動(55巻8号)などを通じて多くの問題点を浮ぼりにしている。しかしながら実際に7年間も生活環境の決して良いとはいえない国々に住み、現地の風習になじみ、言葉をおぼえ、慣れない契約書に神経をすりへらし、宗教・風俗の違う現地の労務者とつき合い、企業に損害を与えないように仕事を進めてゆくことは、どう考えても並大抵の努力では済まされまい。海外でひと儲けをたくらんだり、名声を得ることにあくせくしたり、自分達こそ開発途上国の救世主と肩をいからせて乗り込んでゆくのでは、必ず無理を生じ、思わぬ破綻をきたすのではなからうか。

一条一郎さんが、何のてらいもない平凡な社会人として現地にとけ込んで仕事をしている姿は、日本の土木技術者が国際社会に出て成果をあげてゆくための、一つの方向を示唆しているといえよう。

【文責・編集部】